

文化交流

国と国、人と人との 交流から生まれるもの

平成25年1月15日(火) リーガロイヤルホテル東京にて当組合の新年賀詞交歓会が盛大に開催されましたが、それに先駆けて同日同会場に於て、恒例の新春セミナーが行われました。

講師には、デザイナーであり、プロデューサーである山本寛斎先生をお招きし、世界各国での先生の活動のエピソードや様々な思いなどを、熱く語っていただきました

山本寛斎氏 プロフィール

●デザイナー／プロデューサー

1944年生まれ。71年、ロンドンにおいて日本人として初めてのファッション・ショーを開催、世界の舞台に躍り出た。これ以降、デビッド・ボウイ、エルトン・ジョン、スティヴィー・ワンダー等との交流が始まる。既成概念突き崩すアヴァンギャルドなファッション・デザインは、時代に敏感な若者から圧倒的な支持を獲得。74年パリ・コレクション、79年ニューヨーク・コレクションへの参加を経て、パリ、ミラノ、ニューヨーク、マドリッド等、世界の主要都市に「ブティック寛斎」をオープン、ファッション・デザイナーとしての地位を確立。

一方、異色のキャストの起用や大胆かつ大掛かりなステージなど、ファッション・ショーの概念を超えた個性的なイベントを通して、人間のエネルギーの強さ、素晴らしさを表現し続けてきた寛斎は、デザイナーとしての枠に留まることなく、イベントという新たな表現形態で世界に挑戦することを決意。93年ロシアで実現されたスーパーショー「ハロー!ロシア」は、モスクワ・赤の広場における第2次大戦後最大のイベント(12万人動員)という快挙を成し遂げた。続く95年にはベトナム・ハノイ市のパイマウ湖上にて「ハロー!!ベトナム」(動員20万人)、そして97年にはインド・ニューデリーのネールスタジアムにて、「ハロー、インドア!!」(動員5万人)を開催。「人間賛歌」をテーマに国と国、人と人との交流を目指したこれらのショーは、いずれも、各国における最大級のイベントとして観衆の絶大な支持を集めると同時に、国際交流への大いなる貢献として絶賛された。2000年、岐阜・長良川競技場にて1000名のボランティアとともに「ハロー・ジャパン」を開催。2004年、自身の半生を新撰組・土方歳三に重ねて描いたスーパーショー「アボルタージュ」を東京・日本武道館にて開催。そしてこのショーを記録したドキュメンタリー映画「アボルタージュ 行くぞ!」が、2005年ベルリン国際映画祭において、映画上映+イベントという特別企画として開催。その後、日本国内で、「アボルタージュ行くぞ!ジャパンツアー」として映画上映+トークライブで全国に展開し話題を呼んだ。2007年、東京ドームにて「KANSAI SUPER SHOW 太陽の船」の監督・総指揮を務め、2日間で4万2千人を動員。前代未聞のイベントとして大喝采を浴びる。2010年、東京・有明コロシアムにて「KANSAI SUPER SHOW 七人の侍」開催。2011年8月から9月にかけて、東日本大震災鎮魂行事「天灯」をインドネシア・バリ島、ウクライナ・キエフ、福島県相馬市にて開催。7月から10月には長崎のハウステンボスにて、スペシャルウォーター・アトラクションと衣裳展、「スーパー元気ステージYAY!」の「日本元気祭り」を開催。2012年9月、北京にて日中国交正常化40周年記念事業「HELLO CHINA!!!」を開催し、寛斎の“娑婆羅”が中国を魅了する。

そしてその“娑婆羅”が、更なるパワーアップを果たして、本年3月に東京・六本木ブルーシアターにて「HELLO JAPAN!!! Produced by KANSAI YAMAMOTO」を開催。

まずは冒頭で、いろいろなことを企画されている今年の予定の中から、先生が約40年前に交流したイギリス出身の歌手、デビッド・ボウイさんの展覧会についてお話をうかがいました。

今年の3月23日から7月28日まで、ロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館(略称 V&A)で行われるこの展覧会では、先生がお作りになったデビッド・ボウイさんの衣装が展示されるそうですが、デビッド・ボウイさんはこの10年ほど人前に姿を現していないそうで、3月23日のオープニング当日には、ご本人が登場されるのかどうか、大変な盛り上がりを見せることでしょう。

このオープニングに参加された後、ロンドンからとんぼ返りして、東京・六本木ブルーシアターにて開催される「HELLO JAPAN!!! Produced by KANSAI YAMAMOTO」の本番、3月29・30日を迎えられるそうです。

精神的に国内のみならず世界中で活動が続けられている先生ですが、半年ほど前、久々に、きっちりと、ロンドンを見られたそうです。その時感じたのが、「オリンピックが有ったせいだと思われるが、まさに見事な都市になっている。これほどまでにオリンピックを招致することに効果があるのか。」ということだそうです。先生の招致活動に対する情熱は、さらに強いものになったそうです。2020年の開催都

市が今年の9月7日に決定されますが、当業界も多くの企業が関連するイベント等を手懸けることになるでしょうから、是非とも「東京」に決まって欲しいものです。

先生は今年で69歳になられるそうですが、「実は毎日毎日が、これで良いのかという悩みの連続です。」というお言葉には、頭の下がる思いがしました。また、「何を生きる目標の先端に持って来るか、人それぞれ違うと思うが、自分の場合“お金儲け”というのが先端には来ない。人々が元気に挑んだり、頑張ったりする姿を見ると、ひたすら涙が出るという体質を持っている」というお話から、その先端にはきっと、“人を喜ばせたい、楽しませたい”というものがあるのだと思いました。先生が世界中で「前代未聞のイベント」を、バイタリティーに開催し続けて行く原動力の「根っこ」が、きっとそこにあるのだと感じました。

講演の途中で、出来上がったばかりだという先生の全活動記録のDVDを拝見しました。

先生の朝は早く、最大の目玉である「スーパーショー」のスポンサーを募るため、朝4時半からお願いの手紙を書いており、1年のうち200日以上がこの作業に費やされることや、世界のデザイナーとし

て君臨してみたいと思い30歳でチャレンジした、パリ・コレクションのこと、女優である、娘・未来さんが誕生したころの話や命名のエピソード、そして、それから30年、いつか大きなイベント、世界一熱いお祭りをしたいという人生最大の夢を叶えた、日本武道館でのスーパーショー「アボルタージュ」の模様など、感動して胸が熱くなり、先生のお話ではありませんが、私も涙が出てしまいました。

他にも数えきれないくらい感動するお話をうかがいましたが、書ききれないのが残念です。最後に一つだけ申し上げたいことは、今まで私が持っていた先生に対するイメージというものは、「情熱的、バイタリティー溢れる」というようなものでしたが、まったく私が想像しているような、そんな次元ではなかったということです。私の想像をはるかに超える「超・超・情熱的、超・超・バイタリティー溢れる」先生のお姿にふれて、どんな目標にも向かっていく、勇気を与えられた思いがしました。今思い浮かぶものは、「スーパーデザイナー／スーパープロデューサー」という言葉です。

広報委員・菅原 英巡／(株)トーガン

